

杉本教授との語らいで・・・(卓球)

横須賀 成 良

杉本氏と卓球との出会い

杉本氏と卓球との初めての出会いは、中学生の頃であった。村の神社の本堂に古い卓球台があり、地元の友人たちと毎日楽しんだ記憶があるという。その後高校に入ってから、通っていた英語塾の講堂にも卓球台があり、そこで授業が始まる前に塾生たちや先生と楽しんだ。しかし、定期的に卓球を学んだのは、社会人になって、子供の小学校 PTA の卓球クラブに入ってからで、コーチが毎週指導してくれたが、地元の卓球連盟の大会に出るほどの実力はまだなかった。本格的に卓球の練習といえるものを体験したのはさらにそのあとで、健康維持のため、大学の同僚に勧められて三鷹の ITS という会員制のクラブに入会してからである。このクラブは荻村伊知朗という世界的に有名な卓球名人ともいえる方が創られた。当時日本唯一の会員制クラブで、山中教子（大学の同僚、新井恵雄先生の奥さんで、元世界チャンピオン）、織部、井上、呂氏などの、全日本大会に出場された実力者がおられ、個人指導されたことが部員たちの自慢の種でもあった。

荻村先生は、国際大会で 12 個もの金メダルに輝いた我が国、いや世界を代表する名選手であった。クラブ創立当初、杉本氏たちが金曜日の夜練習していたころは荻村先生もご存命で、部員の練習を見てくださり、貴重な助言をしていただいたことを懐かしく思い出します。ある時、荻村先生

が缶ビールをおいしそうに飲みながら、ガラス越しに杉本氏の練習を見た後、「杉本先生は、バックのスイングの形が外国人的で、肘が前に出ていてよく振り切れている。バックを生かしたら良い。」との助言をされたそう。その時はあまり意識していなかったが、荻村先生の予言通りバック・スマッシュは現在の杉本氏のポイントゲッターとなった。

そのころ、杉本氏は色々なラケットやラバーを試している。その中に山中さんが考案され中国で製造させた Tenaly（写真の左側）や、両側が少しへこんで、相撲の行司さんが手に持っている軍配（団扇）のような形をしたラケット Swing IVS（TIBHAR）（両側がくびれて達磨のような形をしているので達磨ラケットなどとも呼ばれた：写真の右側）などが気に入り愛用していた。達磨ラケットの特徴は、くびれている分だけ軽くなり、面積も少ないため、スイングする際の空気抵抗が減りスイング速度が速くなる。結果的に、スマッシュで飛んでいく球の方向が、フォアの場合はより左隅へ、バックの場合はより右隅へ決まることになる。つまり、相手にとってより外側に飛んで来るので守備しにくくなるのだ。このラケットを使用していたフランスの選手（シーラー？エロワ？）がチャンピオンになったというエピソードは有名である。



審判員に進んだ理由

三鷹の ITS で練習を積み、強い選手の話の聞いたり、色々な大会を観戦したりするうちに、杉本氏自身も試合に出てみようと思ひ始め、三鷹や地

元日野市の大会などに出場するようになったが、何度出ても負けばかりで、それは惨めな年月が続いた。ある時、三鷹の大会で見事優勝した選手に、無謀とは思ったが、「私もあなたのように優勝したいのだが、どのような練習と心構えで臨むべきですか？」と尋ねたという。するとそのベテラン選手は、杉本氏をじっと見て、ニヤッと笑って（そのように見えたという）、「このような大会で1000回ぐらい負けましたか？」と訊き返したそうだ。その時杉本氏は考え先ず、ずいぶん無茶なことを言う人だなと思った。1000回も出場したら人生は終わってしまう。でもこの方は、「あなたじゃ無理だよ。あきらめなさい。」という助言をしようと思ったのかもしれない。それならば、選手として優勝するのは諦めて、審判の道で優勝しようと考えたのだ。しかし思い返してみれば、100回の出場は可能である。今では毎週のようにどこかの市町村で大会が開かれているから、できる限りの大会に参加して、一日数試合をこなせば、一か月3回として一年に36回大会に出れば、10年ぐらいで1000試合達成できたかもしれない。しかし、一回戦で敗退したらこれは達成できませんネ。

審判員・競技役員としての活動

杉本氏は、審判員としては、平成15年11月1日に、公認審判員の資格を取得している。彼にとってはこの種の資格試験は初めての体験であり、今でもそのときの状況は鮮明に覚えているという。『日本卓球ルールブック』を何度も読み返し受験に備えた。この資格取得のためには、筆記試験のほかに実習試験があり、江戸川スポーツセンターで開催された全国青年大会卓球競技において、初めて副審そして主審の実習体験をした。最初から最後まで緊張しっぱなしだったことを今でも覚えているそうだ。ベテランの審判とペアを組み、副審を数試合体験してから主審を務めた際には、

カウントのコールを間違えたり、ボールの管理やベンチの様子など細かな配慮が足りなかったりで、散々であったという。しかし、とにかくこれが杉本氏の審判員としての第一歩であった。

その後、杉本氏は審判の経験を積むのだが、私との最初の出会いは東京都卓球連盟主催の審判研修会であったと思う。日光のあるホテルでの研修会は明るくかつ厳しく、私をはじめとする経験豊かな審判役員の方々が、東京の多くの審判員を熱心に指導してくれました。その数年後、青森県の三戸で、「サ克蘭ボカップ」という卓球の全国大会があり、はるばる東京から参加した杉本氏と宿舎で一緒に、オーストラリア、ブリズベン産のカラスミを肴にお酒を飲みながら、夜遅くまで卓球論議を交わしたことを懐かしく思い出します。

その後、杉本氏は平成20年4月29日に上級公認審判員、平成22年6月29日に国際審判員の試験に合格、さらに平成23年4月24日に、国内での審判活動のための最高位の資格である公認レフリーの試験に合格し、これでひと段落であった。次々と上位の審判資格試験を受験するためには、審判員としての経験を積む必要があり、実際に数々の大会の審判を体験したはずである。その度ごとに『日本卓球ルールブック』、『卓球競技の審判法／審判員の手引き』、『国際卓球ルール』などを入念に精読し、各大会に臨んだことは言うまでもない。他のスポーツのルールと同様に、毎年のようにルールの改正があり、そのチェックのための情報収集や、審判員資格更新のための研修にも、杉本氏は欠かさず参加し、より良い審判員になるための心構えに努めてきた。

その間に、成城大学の卓球部の顧問となり、関東学生卓球連盟に所属する卓球部の活動にも参加することとなる。当初は6部であった成城大学卓球部も、優秀な選手が入部してくれたこともあり、また監督はじめOB・OG先輩方のご支援により、現在では4部にまで躍進している。その功績

が認められ、平成 25 年に大学内で表彰されたことは、杉本氏にとってはうれしい出来事だったろう。また、女子チームも編成できるようになり、同じく 4 部で活躍中だという。杉本氏は、関東学生卓球リーグ戦の副審判長として、主に 1～3 部のリーグ戦や入れ替え戦などで審判を務めることがある。成城大学の試合の審判をすることは出来ないが、同じ会場で成城の卓球部員が試合をしている時などは、やはり気になるのが正直なところであろう。成城大学卓球部の部長としてベンチに入り、試合に参加したこともあるが、春季・秋季のリーグ戦の時期が始まると、審判活動が忙しく、部員たちの練習や合宿になかなか出られないのが気がかりだという。

関東学連での活動のほかに、杉本氏は東京都卓球連盟の競技委員として、とくに審判委員会の委員として、毎月 of 審判委員会に参加したり、全日本卓球選手権大会の東京都予選会などの審判長を務めたりしている。その上部団体である日本卓球協会のルール・審判委員会委員として、ルールのほかにユニフォーム、試合球、ラケット類について生ずる様々な問題の検討や情報交換を行ったり、日本で開催された各種国際大会（国際障害者卓球選手権大会（2012 World Deaf Table Tennis Championships）、全農 2014 世界選手権大会（Zen-Noh2014 World Team Table Tennis Championships in Tokyo）など）で役員や審判の活動をしたり、海外で開催された国際大会（オセアニア・ジュニア選手権大会（The Oceania Junior Championships）、ニューカレドニア・ジュニア・カデット・オープン大会（2013 New Caledonia Junior & Cadet Open ITTF Global Junior Circuit Event）など）で審判も務めた。毎年初めに東京で開催される天皇杯・皇后杯全日本卓球選手権大会や東京卓球選手権大会などは国内最大級の大会で、審判や役員の活動としては大変有意義だという。

地元では、日野市卓球連盟の理事として、市内で開催される各種大会の競技委員や審判長としての活動にできる限り参加する一方、選手としては

日野市卓連所属の高幡クラブ、東京都卓球連盟所属の東友会の選手として、機会があれば各種大会に出場している。選手の立場から審判の在り方をチェックすることも重要であり、また超一流の選手の試合を審判として間近で観察できることは、杉本氏の卓球技術の向上にもつながり、最近ではそれなりの成果を上げているようだ。

以上、杉本氏との語らいは長いようでもあったが、終わってみればまだ語りたいことが多々あったようでもあった。